

# ジャイナ教ではなぜ修行するのか？

堀田和義

## ——輪廻と解脱

ジャイナ教でも仏教と同じく修行の必要性が説かれる。それでは、「なぜ修行するのか」と理由を問うたならば、必然的にその修行の行き着く先、すなわち、ジャイナ教徒が目指す最終目的を明らかにしなければならぬ。さらにそれだけではなく、出発点となる我々の現在の状況、そしてそれを乗り越えるための手段や道筋についても考えなければならぬ。今回は、ジャイナ教と仏教を比較しながら、これらの点を紹介していきたい。

### ジャイナ教の輪廻転生

インドの宗教の多くがそうであるように、ジャイナ教と仏教でも、人間を含む生きとし生けるものは、無始の時より生まれては死に、再びそれを繰り返すという輪廻転生りんねてんしゅうをさまよっていると考える。第三回で述べたように、善悪の行為にしたがって、ジャイナ教では、神、人間、動・植物、地獄の住者という四つの境遇、仏教では、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天という六道のうちのいずれかに生まれ変わるとされる。

しかしながら、神や天などというより良い境遇に生まれることが真の目的ではない。究極的な目的は、再び生まれぬこと、すなわち輪廻転生からの解脱である。

そして、インドの宗教が共通して解脱を目的としていることからわかるように、そこに至るための手段や道筋こそが各宗教の教えであり、オリジナリティーであると考えられる。ジャイナ教の場合は、「三宝」と呼ばれるものが解脱を獲得するための手段と考えられている。

### ジャイナ教の三宝

ジャイナ教の二大宗派である白衣派びやくえと空衣派くうえの両方が權威を認める綱要書『真実の意味を理解するための経』では、「正しい見解」「正しい認識」「正しい行い」という三つのものが解脱を獲得するための手段であると述べる。ジャイナ教ではこれら三つを「三宝」と呼んでおり、仏教で仏(ブツダ)・法(ブツダの教え)・僧(僧団)が帰依の対象として三宝と呼ばれるのとは異なっている。

る。

「正しい見解」というのは、「真実の意味を信じること」である。ここでいう「真実」とは、後述する七つ、または九つの真実を指す。言うなればこれがジャイナ教の教えそのものであり、それを信じるのが求められている。他にも、神格（一切知者であるジナ）、聖典（ジナが説いた教え）、苦行者（出家修行者）に対する信仰を正しい見解とするものもあるが、その場合は、仏教でいうところの仏法僧への帰依に相当する。この正しい見解は、ジャイナ教が説く解脱不可能とされる時間周期でも獲得可能なものであり、解脱獲得のための最初のステップとして非常に重要視されている。

「正しい認識」は、ジャイナ教では靈魂に備わっている本性的な属性と考えられている。しかしながら、善悪の行為の結果として外界から漏れ入ってきた物質的な業に覆われることで、靈魂はその力を發揮できなくなっている。そのため、業を滅ぼしたレベルに応じて、①感官による知、②聖典に関する知、③直観的な知、④他人の心を読む知、⑤一切知という五種類の認識が順次発現す

るとされる。

「正しい行い」の基本は、「生き物を殺さない、嘘をつかない、与えられていない物を取らない、性的行為を行わない、所有をしない」という五つの誓戒を守ることである。出家修行者はこれら五つを完全な形で守ることが求められ、その場合には大誓戒と呼ばれる。一方、在家信者の場合は、部分的にしか守ることができないため、小誓戒と呼ばれる。ジャイナ教は、これら五つの誓戒の中でもとりわけ一番目の「生き物を殺さないこと」（不殺生）を重視していることで知られる。

「正しい行い」は、このような誓戒を遵守することで達成されるが、最も基本となるのは激情を抑制することである。ジャイナ教では、激情とは欲望と憎悪の二つを指し、前者はさらに、怒り、驕り、偽り、貪りという四つに分類される。これらを抑制すれば、その抑制のレベルに応じて、正しい見解の獲得、小誓戒の遵守、大誓戒の遵守というように、各人の美質も向上する。また、欲望と憎悪の二つは、仏教の三毒、すなわち貪（貪り）・瞋（怒り）・

日本からインドにたどる——田中純男編

# 釈迦信仰の世界

日本の釈迦にまつわる行事や信仰を天欄に見出しを立ててエッセイ風にまとめ、貴重な写真を多数掲載。そして後半では、釈迦とは誰かをテーマに日本から中国、インドへと、読みやすい脚注形式で釈迦信仰の世界を訪ねます



A5判カバ装二〇八頁  
本体2100円＋税

## 十三仏の世界

追善供養の歴史・思想・文化

【第2刷】A5上・本体7,800円＋税

図書出版 **ノンブル社**

東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F  
Tel.03-3203-3357 Fax.03-3203-2156  
http://www.nonburusha.co.jp/

新刊

痴ち(迷妄)の中の貪と瞋に対応している。

### 七つの真実

それでは、「正しい見解」の内容である「真実の意味を信じること」の真実とはどのようなものであろうか。先述の『真実の意味を理解するための経』の記述によれば、真実とは、①靈魂(靈魂が存在する)、②非靈魂(靈魂ならざるものも存在する)、③業ごうの漏入(善悪の行為によって物質的な業が靈魂に漏れ入る)、④業による束縛(漏れ入った業によって靈魂が束縛される)、⑤業の遮断(業が漏れ入るのを遮断することができる)、⑥業の滅尽(すでに漏れ入ってしまった業を滅ぼすことができる)、⑦解脱(業が漏れ入るのを遮断し、すでに漏れ入ってしまった業を滅ぼせば、靈魂が輪廻転生から解放される)という七つのカテゴリーを指すとされる。そして、⑤⑥のプロセスこそが、修行と呼ばれるものに相当し、業の遮断には警戒の遵守が、業の滅尽には苦行が有効であると考えられる(苦行については第七回で詳しく述べる)。

これら七つに善業と悪業の二つを加えて九つの真実を数えるものもあるが、七真実説では、「業の漏入」と「業による束縛」にそれら二つが含まれる。この「漏入」に相当する言葉は仏教にも見られるが、ジャイナ教では「漏れ入るもの」、すなわち物質的な業と考えるのとは反対に、「漏れ出るもの」、すなわち業を引き起こして輪廻転生をもたらす煩惱と理解されてきた。しかしながら、最初期の仏教ではジャイナ教と同様、漏れ入ってきて輪廻の原因となる業などを意味していたことが、これまでの研究で明

らかにされている。

先にも述べたように、これら七つの真実はジャイナ教の教え全体をカバーしている。そのため、後代の文献には、これら七つの真実を枠組みとして教えを説く文献が数多くある。また、靈魂に関する考察は自我論、靈魂の属性である精神作用に関する考察は認識論などに属する。他にも、非靈魂に関する考察は存在論、靈魂と非靈魂の相互交渉は業論や修行論に関わるものとなる。

これら七つの真実がそれぞれ独立したのではなく、輪廻転生から解脱へと至る一連のプロセスを示しているのは明らかである。ここでは、我々の靈魂は善悪の行為によって漏入した物質的な業に束縛されているという現状(＝輪廻転生)、業を滅ぼすことで獲得される到達点(＝解脱)、解脱を獲得するために必要な業の遮断と滅尽(＝解脱を獲得するための手段)が提示されている。

これらに相当するものを仏教で考えるならば、四諦しじつ(苦諦・集諦・滅諦・道諦)説が近いかもしれない。どちらも、苦しみくるしみに満ちた現状とその原因、苦しみの滅という到達点、そしてそこへと至る手段を提示する点が共通している。一方、「正しい見解」「正しい認識」「正しい行い」という三宝は、仏教で言うところの八正道はつしやうだうに比せられるだろう。ただし、仏教の場合には四諦説の方が大枠で、八正道が道諦としてその中に位置付けられているのに対し、ジャイナ教の場合には三宝(道諦に相当)が大枠で、そのうちの正しい見解の中で七真実説が説かれている点ちまが異なる。

## 性質の十四階梯

ジャイナ教では、靈魂にはその性質にしたがって十四段階の序列があると考える。例えば、正しい見解の正反対である「誤った見解」を持つ者は最初の階梯に位置付けられ、最上位となる十四番目の階梯には、あらゆる活動、およびその結果としての善悪の業を離れた一切知者が位置する。

先に述べた三宝との関連で言うならば、正しい見解を獲得した者は四番目の階梯に位置付けられる。そして、五番目の階梯には部分的に厭離した者、すなわち在家信者として小誓戒を守る者が、六番目には全面的に厭離した者、すなわち出家修行者として大誓戒を守る者が位置付けられる。在家信者と出家修行者の間に一つの階梯の違いしかないという点、出家修行者でさえも解脱に至るにはさらに八つの階梯を進まないといけない点は注目に値する。

## ジャイナ教の解脱

新たな業の漏入を遮断し、すべての業を滅ぼした者は、一切知を獲得する。そして、その生で解脱するとされる。解脱した靈魂は寿命が尽きたら肉体を捨て、その重みを離れることで上昇し、終には上方世界の頂点にある完成者の世界に到達する。

ただし、ジャイナ教では、解脱が獲得可能な機会は限られている。解脱の可能性があるのは人間に生まれた者だけであり、しかも適切な時間周期に「行為の地」に生まれなければならぬ(第三回参照)。

また、靈魂には解脱可能な靈魂と解脱不可能な靈魂という区分

があり、後者は解脱への道が閉ざされている。この解脱不可能な靈魂に類似したものとしては、仏教に「二闍提」や「無種姓」と呼ばれるものがある。これらは、どれほど修行しても決して悟ることのできない者を指し、そのような者の存在を認めるか否かという点には、仏性論において大きな議論を引き起こした。

また、空衣派では女性の身体が解脱に適さないと考え、女性の解脱を認めていない(ただし、正しい見解の獲得は可能とする)。そのため、女性が解脱するには男性に生まれ変わる必要があるという。このような考えは仏教にも見られる。例えば、『法華経』には変成男子へんじょうなんしといって、女性は男性に変わってからしか成仏できないという考え方が見られる。

以上に見てきたようなジャイナ教と仏教の解脱は、基本的には、人間の努力によって達成されるものであり、ヒンドゥー教の一部に見られるように、神の恩寵などが関与する余地はない。このように、徹底的に自業自得(自分の善悪の行為の結果は、自分自身が引き受ける)の法則に基づくものであるからこそ、修行が大きな意味を持つのである。

第六回では、自我論に焦点を当て、仏教の無我説なども比較しながら、ジャイナ教の靈魂観を紹介したい。

# 春 *Shunjū* 秋

## 2016 7

巻頭エッセー フェルッチョ・ブゾーニの横顔  
— 自筆の風刺画をめぐる考察 畑野小百合 1

中村元 — 熱情と思惟(2) 若松英輔 5

モーツァルトの青春 断想① 塩山千仞 9

ケアリング人智学の試み② 飯塚立人 12

世界宗教におけるキリスト教の位置(2)  
— 死によって実現しなかったオックスフォード大学での講演原稿  
エルンスト・トレルチ / 深井智朗 訳 16

内部と外部 老子と儒家の場合  
〈いのち〉でたどる東洋思想④ 小倉紀蔵 20

ジャイナ教ではなぜ修行するのか?  
— 輪廻と解脱 ジャイナ教と仏教⑤ 堀田和義 24

オルガン文化史のなかの日本  
日本オルガン小史⑩ 完 馬淵久夫 28

京都十景⑥ 遊びの技は蹴鞠けまり 鳥居本幸代